とっさに出ることば

花梨

二年前の四月、梅田の阪急三番街を歩いていたら、向こうから歩いてくる男性と目が合った。

あらぁー、吉弥クンでないのー。

私が大好きな落語家の、桂吉弥ではないか。目をハートマークにしながらとっさに

「ファンです。握手してください。来月行きます」と棒読みで言ってしまった。

桂吉弥は、故桂米朝一門の落語家で繁昌亭大賞を受賞した実力派の四十六歳だ。

十年前のＮＨＫの朝の連続ドラマ「ちり

とてちん」に出演したことがあり、現在も「ちちんぷいぷい」にレギュラー出演している。

彼の落語はたたずまいがよくて、上方落語家にありがちな下品さがないのが、私の好むところで、時々友人と公演を聴きに行く。

翌月の「サンケイブリーゼ桂吉弥独演会」のチケットもゲットしてあったのだ。

言ってしまったあと、後悔した。

私はあなたのファンです。握手していただけますか。来月の独演会にも行かせてもらいます」

くらい、もっと丁寧に言えばよかったと。

急にはなかなか思い通りのことばが出ないものだ。特に私のように普段はつまらないことをよくしゃべる者にかぎって……。

とっさのことばといえば、不覚にも過去に二度ひったくりに遭ったことがあって、一度は夜八時頃、自宅近くの道を一人で歩いていて人通りが途切れたとき、二度目は昼日中、自転車に乗って交差点で信号待ちをしていたとき。二度とも、近くで待機していたらしいバイク乗りにバッグをひったくられたのだ。

私はすぐには声が出ず、二、三度パクパク呼吸してから「どろぼう！」と叫んだが、バイクはもう見えなくなっていた。

思い通りのことばどころか、声そのものが出ないのだから、情けない。

とっさにことばを出すのは苦手だが、他人から言われて忘れられないことがある。

パートの仕事の帰り、商店街を歩いていて、後ろから自転車に乗ったオッサンがベルを鳴らして「のけのけー」と叫びながらやってきたので、「嫌な奴ちゃ」と思いながら右側に寄った。すると、その失礼なオッサンは左側に寄ってほしかったらしく「アホー。そっちと違うやろ」と言い放って通り過ぎたの

だ。
君子危うきに近寄らず。
私は君子ではないが、黙ってやり過ごした。
だが怒り心頭に発すで、頭から湯気が出た。
一方で、私は若い頃から運動神経が鈍いせいか はたまた運動不足のせいか、よく自転車から降りた瞬間とかに足を捻挫したり、駅の階段を踏み外したりするのだが、そうなってしばらく動けないでいるときに、通りすがりの人から「大丈夫ですか」などと声をかけられたりすると、その人情に涙が出そうになるのだ。

だが最近は、そうなっても声をかけられることは少なくなった。そんなとき私は、その昔、落語のまくらで聴いた小噺を思い出す。

女が溺れてるでー。助けに行かなぁ」
待てぇ。若いんかぁ、年寄りかぁ」
婆さんやー」
ほな ほっとこー」

悲しいかなこれからはいっそう、とっさの判断や言動はみっともなくなっていくだろう。
まあせいぜい脳を鍛えねばならぬ。
握手したときの吉弥クンの手はぽっちゃりとしていた。私は、握手しながら「ありがとう」と言ってくれた吉弥クンがますます好きになった

大阪のいぶき 122 号投稿」